

Battles in W.W.II

第1回 バトル・オブ・セバストポリ 杉浦 康

✦ 世界最強の大要塞

ドイツ軍のロシア侵攻2年目の春、(1942年3月)ヒトラーはロシア戦線南方部で夏季大攻勢をかけ、対ロシア戦の決着を計ろうと『ブラウ作戦』が立案された。

『ブラウ作戦』計画の第一段階は「クルスク・ハリコフ方面及びタガンログ・ロストフ方面から、強力な2個軍集団で赤軍兵力を撃滅しつつスターリングラードへ進撃」する一方、第二段階は「タガンログ・ロストフ方面からクリミヤ半島と要地ケルチを経てコーカサス山脈に侵攻し、マイコブなどの油田地帯を抑え」て“国力”の充実を計ろうというものであった。

クリミヤ半島の先端部にあるセバストポリは良港で、ソ連黒海艦隊の大基地として重要な役割をになっていた。そのため、クリミヤ



1942年5月、スターリングラードを目指していたドイツ中央軍集団はヒトラーの命令で二手に別れ、一方はコーカサス方面の油田地帯へと進撃した。これを『ブラウ作戦』といった。写真は SdKfz250 軽装軌装甲兵員輸送車に乗り、燃える油田地帯を行くドイツ軍。

戦争の昔から要塞化が進められ、
外郭砲台を含め当時は難攻不落の
要塞といわれていた。

要塞前面には内奥に深く切れ込

んだセヴェルナヤ湾を配し、そ
の向う側の外郭陣地には、地下幾
層にもなった巨大なコンクリート
と分厚い装甲板による堡壘が連な



(上) 1942年5月～6月、ドイツ第11軍はソ連黒海艦隊の基地でもあり、世界最強の要塞と当時称されたセバストポリ攻略に向かった。写真はセバストポリ攻略戦の司令官で、ドイツ国防軍きっての戦略家であったエーリッヒ・フォン・マンシュタイン大将(中央)。

(下) 世界最強といわれたクリミア半島のセバストポリ要塞。中央が要塞と市街地で左側が黒海である。要塞攻撃は1942年6月7日に2,000門の砲による5日間の砲撃と空爆の後総攻撃が行われ、ドイツ軍も多大な損害を受けながら、7月7日に要塞を陥落させた。

り、主要な砲台には30cm級の海軍砲を中心として、無数の機関銃座、迫撃砲座、中小口径砲座と地雷原が複雑な迷路によって結ばれ、いざという時にはこれらが連携して敵を迎え撃つように縦横に配備されていた。

これを一次防御線とするならば、第二次防御陣地は要塞の東方面で岩山が連なる天然の要害で、地の利を生かして洞窟や岩穴などに強固な砲座や機関銃座が多数配置されていた。そして、最後の防御線は市街地の周囲をぐるりとめぐる強固な塹壕、対戦車砲陣地のほか迫撃砲陣地が地下でそれぞれに連結されていた。そして、半島先端部は要塞そのものとなっていたのだった。

赤軍の守備部隊は火砲700門、迫撃砲2,200門、海岸重砲台45個部隊、赤軍8個師団、砲兵10個連隊、対戦車連隊の他、海軍歩兵と戦車大隊そして独立守備大隊など、合計102,000名が要塞の守備にあたっていた。

✦ “シュテールフアング作戦”発動

これに対して要塞への攻撃は、ドイツ陸軍第一の頭脳派將軍といわれたE.v.マンシュタイン大将が指揮する第11軍で、戦力はルーマニア軍を含む9個師団だった。6月7日にこの世界最強といわれたセバストポリ要塞攻撃が開発されたのである。

攻撃は“シュテールフアング作戦”と呼称されたが、まず、攻撃にさきだち6月2日、v.リヒトフォーフェン大将のドイツ第8航空艦隊の爆撃機、急降下爆撃機が空爆を開始した。飛行基地からはたった10分間の飛行時間だったので、1機が1日4回も5回も出撃し、毎日延べ1,500機～2,000機が赤軍陣地を叩いた。

一方、地上軍は、第二次大戦で



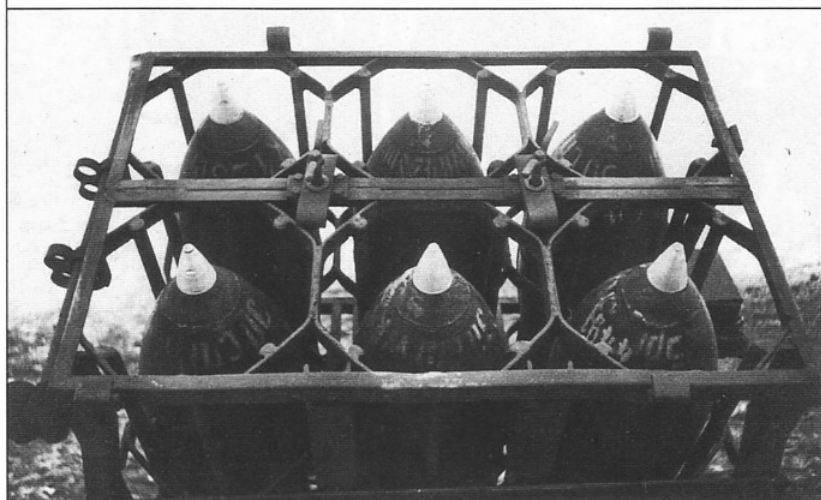
(上) セバストポリ要塞の攻略は第二次大戦最大の攻城戦といわれるが、最後の仕上げは歩兵師団の役割だった。要塞攻略は“シュテールファング作戦”と呼ばれ、北部方面攻撃は第54軍団の4個歩兵師団と1個連隊が行い、主攻撃の南方方面は第30軍団の3個歩兵師団が行った。

(下) フォン・リヒトホルフェン空軍大将指揮下の、第8航空艦隊のJu87シュツーカー急降下爆撃機などが、連日延べ1,500機から2,000機で、空から要塞の外郭陣地を攻撃した。本機は急降下の際、恐怖感を伴う独特の降下音を発した。

最大規模といわれた火砲1,300門以上(北アフリカではモントゴメリーが1,000門を集中使用)を集中して、堡壘周辺の銃、砲座に砲撃を浴びせた。その上、木枠から発射する28／32cm連装ロケット砲(sWG41～当時は重投擲器41と呼ばれた)570門を要塞前面に配備した。攻城戦でのロケット砲は物凄い威力を発揮した。

北側の第一防御線の主な砲台群には、ドイツ側がそれぞれに名前をつけていた。ベルベク峡谷とセペルナヤ湾間の「マキシム・ゴーリキ1」は連装30.5cm海岸砲を備えた地下3層にもおよぶ巨大砲台





だった。その他、「スターリン砲台」、「モロトフ砲台」、「チェカ砲台」、「ゲベウ砲台」など普通の砲撃では撃破できないので、355 mm 臼砲を運び込み、長さ 3.6m、重量 1t もの特殊砲弾を発射して、堅固な砲台を次々と沈黙させていった。

また、このセバストポリの攻城戦では他の巨大砲も活躍した。すなわち、80 cm超重列車砲“ドーラ”と、60 cm自走臼砲カールで、いずれも在来砲の極限発達型ともいえる砲であった。とくにドーラ列車砲はバフチサライ(シンフェロポリの南 20 km)に設置されて、湾を挟んで要塞を砲撃したが、崖を利用して作られた地下数十メートルにある大弾薬庫を、一瞬にして爆砕する強烈な効果を上げている。

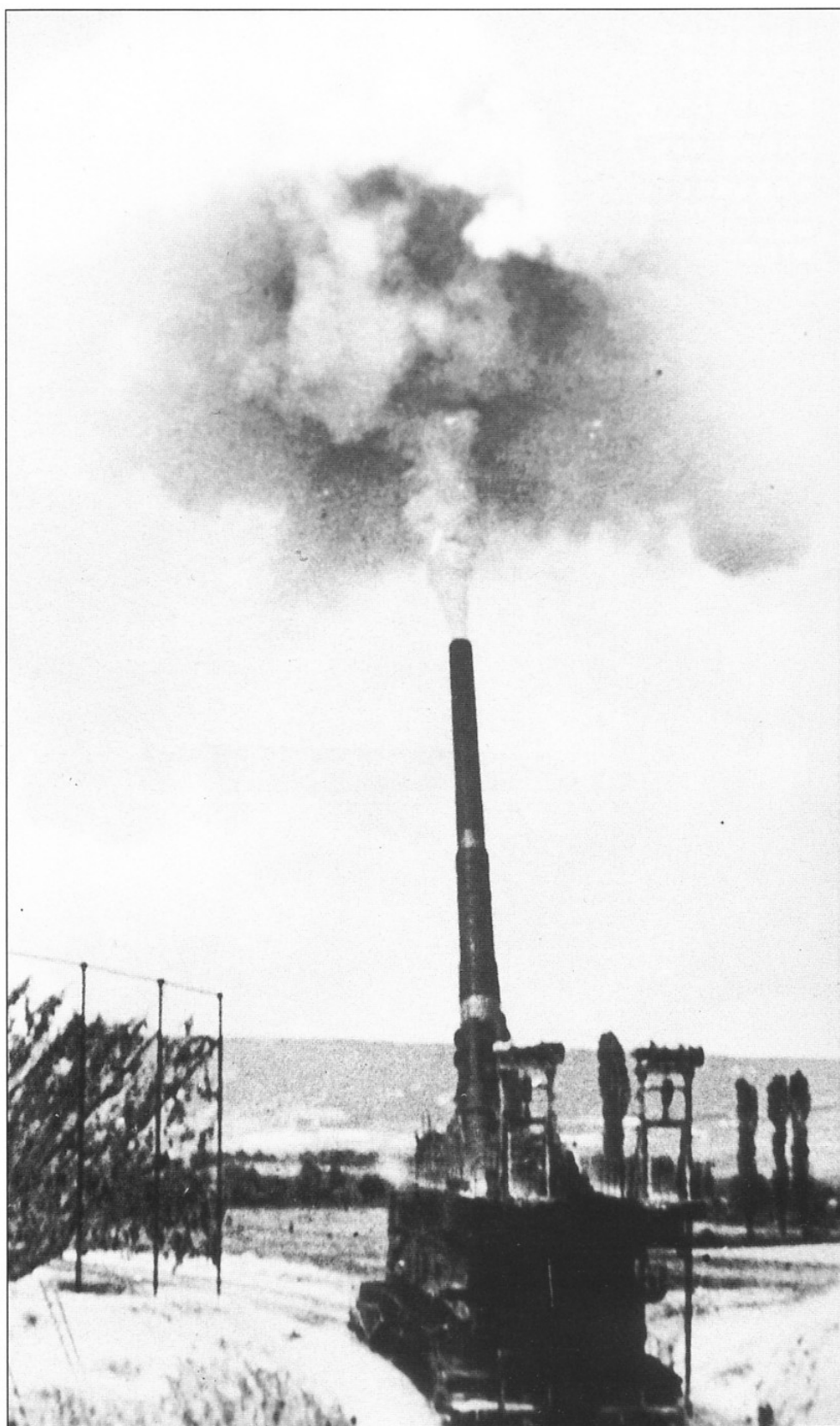
一方、カール自走臼砲は口径 60 cmで同型砲が 6 門製造され、各 2 門で重砲兵大隊が編成されていた。セバストポリでは用途に応じて重榴弾 2.17t と軽榴弾 1.70t 弾を用いて、「マキシム・ゴーリキ 1」砲



(左ページ上・中)
ドイツ軍は新兵器
「連装ロケット砲」を
要塞攻撃に初めて多
数投入した。22個
中隊の580門の一斉
射撃が、要塞の守備
隊に浴びせかけられ
て威力を発揮した。
写真は東部戦線にお
ける 28 / 32 cm
NbW41 ロケット砲。

(左ページ下) 一斉
砲撃中の 17 cm K18
重榴弾砲中隊の砲列。
この砲は 2 重駐退複
座装置と 360 度旋回
射撃可能な非常に優
れた重砲だった。最
大射程は 28 km で、
セバストポリ要塞攻
略戦ではこうした重
砲兵部隊が大活躍し
た。

(右) 巨大砲ドーラ
の発砲の瞬間：ドイ
ツ軍は 3 種のスー
パー火砲をこの攻城
戦に投入した。もっ
とも有名なのが在来
砲の極限発達型であ
る 80 cm 超重列車砲
ドーラで、要塞の対
岸セヴェルナヤ湾に
面したバフチサライ
に進出し、要塞に
巨弾の雨を降らせた。



セバストポリ要塞に砲撃を行う80 cm砲
ドーラであるが、目
標は40 kmほど先であ
る。1時間に4発程度
の発射速度であるが、
崖を利用した要塞の
弾薬庫を爆砕してい
る。なお、方向射角
の調節はレールの曲
線を利用した。

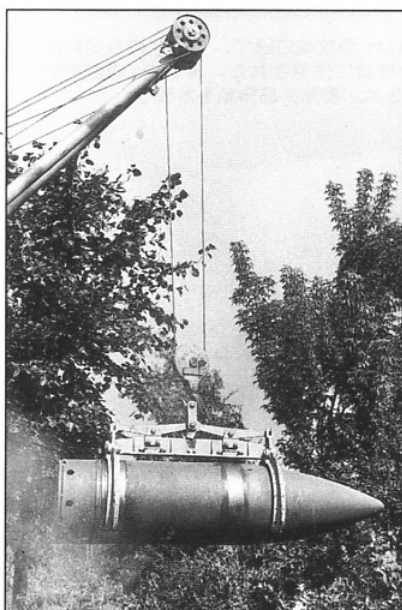


射撃中の 60 cm 自走砲カール。重量 124t の攻城臼砲で、この型の自走砲は 1941 年に 6 門が完成し、全てロシア戦線で使用された。長さ 5m の砲身から 2.2t の対コンクリート榴弾が発射され、要塞外郭陣地を攻撃した。





(左上) 80 cm列車砲ドーラの対コンクリート弾で、セバストポリ要塞攻撃でも使用されている。重量は7.1tもあり、砲弾の高さは240 cmで右の薬莖部は高さ130 cmである。また、榴弾(HE)の場合は4.8tで射程は47 kmだった。



(右上) 60 cm自走砲カールにはIV号戦車改造の専用弾薬車が付随し、重量2.2tの榴弾を6発積載していた。

(下) 1942年6月27日、ドイツ軍は多数のボートと突撃班を編成して要塞攻撃に向かった。この後、第22(ハンブルク)、第24歩兵師団(ドレスデン)の歩兵大隊群が、市街と要塞に殺到した。

台を破壊している。

巨大な堡壘が沈黙すると、ザクセン第24歩兵師団は「モロトフ」、「ゲペウ」、「チェカ」砲台を攻めて前進し、第22歩兵師団は「スターリン」、「ヴォルガ」、「ウラル」砲台を占拠した。第132歩兵師団は「マキシム・ゴーリキ1」砲台から「北」砲台を制圧し、ドイツ軍は要塞を目前にしたセベールナヤ湾へと進出した。また、岩山の多い北東面からの攻撃は、第4ルーマニア山岳師団が担当した山岳地を越えて湾の東側に進出した。

最後の東側からの攻撃は、巧妙にカムフラージュされた岩山の陣地を第72、第170、第281師団が攻め、要地サブーン高地へと進出し要塞を眼下にした。

こうして要塞市街地を包囲したドイツ軍は、6月27日深夜に要塞攻撃の突撃班を編成し歩兵大隊群がそれに続行した。早朝からJu-87シュツーカー急降下爆撃機が歩兵師団の支援を行い歩兵部隊も活躍し、7月3日、第22、第24歩



兵師団の猛攻により要塞はついに陥落し、火砲500門、迫撃砲800門、対戦車砲、対空砲150門が捕獲されたのである。なお、要塞の司令官だったペトロフ少将は、要塞陥落に先立つ6月30日モーターボートで脱出している。

✦ 赤軍の上陸反攻作戦

セバストポリ要塞攻略の約1年後の1943年9月初頭、ドイツ第17軍はコーカサスから全面撤退しクリミヤ半島に移動した。1944年3月ソ連軍の総攻撃が迫ってきたが、ヒトラーは黒海の制海権が周辺の日和見諸国に及ぼす政治的な影響を与えて、クリミヤ半島の死守を命じた。ドイツ第5軍団の残存兵力がこの任務にあたったが、これまでこの天然の良港はドイツ軍が黒海を渡り大陸へ撤退して行く港として、非常に重要な役割を果たしていた。

ドイツ軍の戦況がもはや敗退一色となった1944年4月、クリミヤ半島を攻めるのは赤軍29個師団、戦車1個軍、砲兵3個師団、独立歩兵3個旅団47万人だった。そしてセバストポリ要塞にはドイツ第5軍の5個連隊が守備していた。

もはや命運は尽きたと判断した軍司令官イエシネク大將は、可能なうちに全ての部隊の撤退をと、ヒトラーに進言したために軍司令官を解任され、柏葉騎士鉄十字章を持つアルメンディンガー中將と交替した。5月5日、赤軍の火砲400門が火を吹き大攻勢が始まった。

5月9日には、要塞付近のヘルソネス空軍基地から出撃して、来襲する赤軍を空から攻撃していたダイヒマン将軍の残存Me109戦闘機13機も、やむなく大陸に撤退していった。

コーカサスから後退してきたドイツ第17軍50,000人のうち、22,



(上) 1944年4月、イエレメンコ将軍の指揮するソ連軍狙撃師団12個と戦車1個旅団は、クリミヤ半島からセバストポリ要塞攻撃に向かった。守るドイツ軍は第5軍団のたった5個連隊で、5月12日、ソ連軍の猛攻で激戦の後、再び要塞は祖国の手に戻った。

(下) クリミヤ半島の最後：1944年春、エルウィン・イエネッケ大將指揮する第17軍25万人が、コーカサス戦線からセバストポリへと後退してきた。この地を確保していたことで多くのドイツ軍兵士が黒海を渡り撤退出来たのだった。



000名あまりが海路、黒海を越えて無事に撤退していたが、激戦の後、残存部隊は壊滅し、5月12

日ついに全クリミヤとセバストポリ要塞は再び赤軍の手に帰したのであった。